

オリンピック・パラリンピックの年に

中津市長 奥塚 正典

前回の東京オリンピック開催は56年前の昭和39年、小学校5年生、テレビにかじりついて応援しました。ちょうど新幹線が東京・大阪間を走り始め、テレビは約9割の家庭にあるものの、大半は白黒テレビ、三種の神器と言われた洗濯機、冷蔵庫の普及率はそれぞれ約6割、4割でした。

さて、この間、世の中は大きく変化。人間が月に行き、家電の新三種の神器やスマートフォンが出現、当時の小学生が描いた夢の多くは実現したようです。叶っていないのは「ドラえもん」の世界、「タイムマシン」と「どこでもドア（瞬間移動機）」ですかね。

さあ、これからの50年、どうなるでしょう。世界の人口は増えるのに日本では減ります。AIが進化し、ロボットが大活躍するでしょう。これまでのように技術革新がさらに進み生産性が向上、時代の抱える難題を解決し新しい文明と平和な世の中を創出していくことが期待されます。

どのような時代になろうと、この中津で幸せに暮らしていくためには、人が互いに助け合い日常が安全で心が満ち足りていく社会が肝要です。そのためには、産業の基盤づくり、人材の育成、環境との共生など未来の土台となるものは今のうちからしっかり積み上げ作っていかねばなりません。そして「住みたい、帰りたい、行ってみたいまち中津」に向かって一緒に懸命に歩いていく「連携力」が求められます。

50数年前の流行歌『若者たち』（藤田敏雄作詞）は、「君の行く道は希望へと続く」と歌われます。そして今、2020年、対照的なリズムで子どもたちが元気に歌い踊る『パプリカ』（米津玄師作詞）は、「花が咲いたら 晴れた空に種を蒔こう」とこれまた前向きです。歌の結びは、「かかと弾ませこの指とまれ」。ビッグイベントのこの年、市民の皆様と一緒に前進、未来を開く一年にしたいものです。



パプリカを踊る子どもたち